二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ヴァンパイアハンター 奈津姫

呪淫の学園

小説 蒼井村正
挿絵 浮月たく

第一章　吸血鬼を狩るもの　006
第二章　潜入　026
第三章　闇の蠢動　048
第四章　虜囚　081
第五章　魔辱　100
第六章　屈辱の呪縛　141
第七章　血の狂想曲　192
エピローグ　254

登場人物紹介

Characters

水凪奈津姫（みなぎなつき）

高位のヴァンパイアと人間の女性の間に生まれた少女。性格は結構お茶目でボーイッシュだが、気位が高く気まぐれな一面もある。相棒の耕太を自分の付属品扱いしているが、実は好意も抱いている。

美島耕大（みしまこうた）

奈津姫のパートナーとして配属された少年。吸血を受けても下僕化しないという特殊な肉体の持ち主。吸血衝動が高まると色々と問題のある奈津姫に、新鮮な血液を与えるのが任務である。

各務原陽子（かがみはらようこ）

全寮制の名門校、盟央学園の生徒会長。十代らしからぬ色香を放つ、美貌を持つ。

藤堂大助（とうどうだいすけ）

盟央学園校長。二十代後半の好青年。

『第五章　魔辱』より　その１

肉体の意外な反応を突きつけられ、汗まみれの顔に困惑の表情が浮かぶ。陽子が振るうイバラの鞭が、腿に、脇腹に、ヒップの丸みに食い込むたびに、奈津姫の上げる声はどんどん艶めかしく潤んでゆく。飛び散る汗にもあからさまな発情臭が混じり、甘酸っぱい少女の匂いがフワリと香り立つ。

「いやらしい声……。鞭打たれて感じていますのね。ご自身の淫らさは棚に上げて、生意気で不遜な言動の数々。生徒会長として、教育して差し上げなくてはいけませんわね」

精神的な余裕を取り戻した陽子は、鞭を振るう手を休めてあざけりの声をかけてくる。

「く……う、うるさいッ！」

気の利いた反論もできずに声を上げる奈津姫。色白な太腿に痛々しい紅色で刻まれた鞭の痕が、みるみるうちに薄れ、消えてゆく。傷痕は消えても、熱い痺れのような痛みの余韻はむっちりとたくましい筋肉の内側に残留し、それが体内でくすぶっている淫情をさらに妖しく燃え上がらせていた。呼吸が甘く切羽詰まったものになり、イバラ触手で緊縛された身体が切なげにくねってしまう。

「ヴァンパイアの超回復力を、ほぼ完全に受け継いでいますのね。半端者のくせに、小癪な娘。ほら、見てご覧なさい。今度はあなたが水凪さんの恥ずかしい姿を鑑賞する番よ」

まだハァハァと荒い息をついている少年の耳元に唇を寄せ、陽子は魔性のささやきを送り込む。耕太の熱く潤んだ視線が、奈津姫の身体にねっとりと絡みついてきた。

「ダメぇ！　耕太、見るなぁァ！」

引きつった声を上げるヴァンパイア少女。耕太にだけは、何もできずに嬲り者になる自分の痴態を見せたくなかった。

「あなたが見たまま、感じたままを、水凪さんにしっかりと解説して差し上げなさい」

「……なつきさん……あんなに鞭で叩かれていたのに、凄く気持ちよさそう」

夢見るような口調で少年が告げる声が、奈津姫の耳に聞こえてくる。上級ヴァンパイアによる暗示は、少年が胸の奥に秘めてきた淫らな思いを掘り起こし、少女を辱める言葉として紡ぎ出させていた。

「もっと気持ちよくなるわ。ほら、見てごらん」

幼児に話しかけているような陽子の言葉と同時に、新たな責めが奈津姫に加えられる。ピッチリと閉じ合わされた太腿の狭間に、ひときわ太いイバラがねじ込まれてきた。黒革でできたレオタード状コスチュームのVゾーンを、直径五センチはありそうな棘蔦がゴリゴリと擦り責めてくる。

「んっ……やぁ、こんなの……ヒッ……んっ……きゅふうッ」

蔦に密生した棘は、ゴムのように柔軟な突起の連なりに変化していた。シリコンゴムのようなプルプルした弾力を持ったトゲの連なりが、股布越しに恥丘を圧迫し、秘裂を強引に割り開いてストロークした。

ズゾゾゾゾゾゾッ！　ズジジジジジジッ!!　黒革の股布を、軟質棘が掻き擦り連打する音が響き、敏感なワレメを痺れさせて快感のパルスが湧き起こる。

「やっ、やぁぁぁ！　きつイッ！　痺れるっ、ひいぃぃッ‼」
熱い疼きを溜め込んだ秘部を容赦なく掻き弾かれ、勝ち気な少女とは思えぬ裏返った悲鳴を絞り出されてしまう奈津姫。
伸縮性に富んだコスチューム生地は、太いイバラの茎に引き伸ばされて、秘裂とヒップの谷間に深々と食い込んでいた。黒革に包まれた股布を丸く張り詰めさせた恥丘と、Tバック気味にコスチュームを食い込まされた尻たぶが、前後のワレメをあからさまにして、蔓草をパックリと咥え込んだ状態だ。
二つの谷間奥に秘められた敏感な部分を、鉤状に湾曲した軟質棘が的確に捉えてストロークし、痺れ狂うような刺激を送り込んでくる。軟質棘がプリプリと掻き鳴らされる音を立てて前後に滑るたびに、拘束された少女の腰がガクガクガクッ！　と痙攣する。
（ダメ……強すぎるっ！　痺れて……力が抜けちゃうッ！）
ハードすぎる素股責めに意識を持って行かれそうになりながら、ヴァンパイア少女は必死に腰をよじり、太腿をきつく閉じ合わせて、イバラ触手の注挿に抵抗していた。
しかし、その程度で力強い前後動を止められるはずもなく、邪淫の意志に操られた棘蔦のストロークはどんどん激しくなってゆく。突き込みを受けるときよりも、引き抜かれてゆくときの方が遙かに刺激が強烈であった。逆反りになった鉤棘が股布に引っかかりながら、薄革一枚下で濡れ疼く粘膜組織を容赦なく掻きむしってゆくのだ。
パックリと割り開かれた大陰唇の内側がゾリゾリゾリッとブラッシングされ、膣口と尿

道口を棘の連なりが小刻みに弾いて通過してゆくと、膣内で制御不能の甘美な痙攣が起きて、熱い発情蜜がジュワァァッ！　と漏れ出て股布を濡らす。
尻の谷奥にひっそりと息づくアヌスの蕾にも鉤棘が食い込み、甘く妖しい余韻を残しながら、肛門の小皺を一本一本掘り返して走り抜けると、背筋が震えながら反り返り、臀筋にえくぼが浮かぶほどに緊張した尻たぶが、太いイバラを一層強く挟み込んでしまう。
（こっ、このまま続けられたら……アタシ……アタシは……ッ！）
固く目を閉じ、歯を食いしばって声を堪える奈津姫。一つ一つの刺激は小さく、浅い。しかし、降り止まぬ雨粒のように、一瞬たりとも休むことなく連続で送り込まれてくるのだ。しなやかな肉体の内側に、快感がどんどん溜め込まれ、ヴァンパイア少女の淫情は決壊寸前にまで追い込まれている。
秘裂とヒップの谷間に食い込んだ股布の脇から溢れ出た愛液がイバラの茎を濡らし、艶めかしい少女の匂いを周囲に立ちのぼらせ始めた。
「凄い、擦られるたびに、身体がビクビクビクッって痙攣してる。……あ、この匂い、奈津姫さんのオマ〇コの匂いなのかな？　フルーツみたいな美味しそうな匂いだ」
あどけなさの中にも興奮した響きを帯びた耕太の声が、少女の鼓膜を残酷に嬲る。
「やぁぁ、黙りなさいッ！　あひっ！　はふぅんっ！」
少年の恥ずかしい指摘の声とともに、クンクンと鼻を鳴らす音が聞こえてくる。ハードな注挿のたびにどんどん濃くなってゆく甘酸っぱい淫臭を嗅がれているのだ。羞恥で脳が

沸騰してしまいそうだった。

（耕太が……コータが見てるのに……見てるのに、声が出ちゃうッ！）

これまで屈辱とは無縁の人生を送ってきた傍若無人な少女のプライドを、股間で動くイバラがズタズタに切り裂き、削り取ってゆく。

ズズズズズズッ！　コリコリコリコリッ！　ジジジジジッ！　蔦状触手の長さを存分に活かした前後動のたびに、トゲ状柔突起と股間が擦れ、掻き弾き合う連続音が上がり、切れ切れにかすれた奈津姫の喘ぎ声と入り混じって淫らなハーモニーを響かせた。

「凄い……奈津姫さんのアソコに、あんな太いイバラが食い込んで……オマ〇コが擦られる音がコリコリコリッて聞こえてくる」

荒い鼻息混じりに解説する耕太の声が、股間に咥え込んだ棘蔦の存在感を一層強めている。少年の恥ずかしい指摘に煽り立てられているのは、恥ずかしさや悔しさだけではなかった。聞き慣れたボーイソプラノで発せられる卑猥な言葉を耳にするたびに、身体の奥で妖しい悦びの波紋が広がるのだ。

（どうして……どうしてこんなに感じちゃうの？　こんなはずない……こんなのでッ！）

自分の身体が被虐の悦びに目覚めつつあることは、絶対に認めたくなかった。

そんな奈津姫に追い打ちをかけるかのように、イバラの責めは速度を増してゆく。注挿の角度が変化し、秘裂の上端を集中的に擦り始めた。

限界勃起したクリトリスが鉤棘で強烈に掻き弾かれ、発生した喜悦電流が恥骨と子宮を

ビリビリと痺れさせる。ひと擦りされるごとに愛液の分泌量が増し、強烈な尿意にも似た切迫感が恥骨の裏側で高まってゆく。

「だッ、ダメぇぇ……こんなので……アタシは……アタシはぁ！」

込み上げてくるものに恐怖を抱き、腰を引いて逃げようとするヴァンパイア少女であったが、イバラ触手はその動きに追随し、クリトリスを徹底的に掻き責めてくる。

秘裂にきつく食い込んだ股布越しにも、その尖りを際立たせている乙女の超敏感突起を、生硬い棘が残酷なまでの執拗さと正確さで捉えていた。

猫の爪のように湾曲した棘でクリトリスを引っかけられて逆撫でされると、淫情の血潮でビンビンにしこり勃った陰核海綿体が根本からへし折れてしまいそうなほどにまで抉り上げられ、細腰がグウウッ！　と前方にせり出されてゆく。恥丘の盛り上がりと腰骨の輪郭が強調され、食い込んだ股布の狭間から、愛液に濡れ光る金色の恥毛が垣間見えた。

まるで、視姦中の耕太と陽子を、「もっと見て！」と挑発しているかのような突き出しを強要されてしまう。

「キヒィ……あ……あぁぁぁ！」

根本からギチギチッと押し曲げられたクリトリスからの、快感と呼ぶには強烈すぎる超刺激に肉体を貫かれ、大きく目を見開き、顔をのけ反らせる金髪少女。今にも弾けてしまいそうな肉体を、絶頂寸前で踏みとどまらせているのは、耕太の目の前で果てるわけにはいかないという奈津姫のプライドだった。

「わぁ……金髪モードのときは、アソコの毛も金色なんだ……」
金色の恥毛を目ざとく見つけた耕太が、感嘆の声を上げる。無邪気な言葉が鼓膜を通じて少女のプライドに突き刺さり、理性に無数の亀裂を刻み込む。
（耕太……もう、ガマンする意味……ないの？）
唯一、心を許している少年に淫らな指摘を連発されながら嬲られ、奈津姫の心を自暴自棄な衝動が蝕んでゆく。絶頂を押しとどめていた理性の堤防が緩み、熱いマグマのような飲悦の波が、身体の奥底から込み上げてくる。
「よく見ていなさい。そろそろ果てますわよ」
「奈津姫さん、イっちゃうんだ……」
楽しげな陽子の声と、淫らな期待に満ちた耕太のつぶやき。
腰反りの限界寸前でしばらく停止していたイバラが、再び動き始めた。
限界勃起のクリトリスを恥丘の奥深くに押し込み、恥骨に押しつけて揉み潰さんばかりに圧迫しつつストロークしてゆく。重い尿意にも似た切迫感が急激に強まり、黒革レオタードに包まれたしなやかな肢体がブルブルと切羽詰まった震えを起こす。
ズリイイイッ！　ピリピリピリピリイッ！　ズゾゾゾゾゾッ！　とどめとばかりにクリトリスを掘り起こして走り抜ける、逆撫での超ロングストローク。
「うあぁぁ！　アタシ……イ……イくうぅウッ!!　イキたく……ないッ！　ダメえぇぇぇぇ～ッ!!　くあぁぁぁぁ～ンッ!!」

『第五章　魔辱』より　その２

圧倒的な拡張感がもたらしたものは苦痛ではなく、骨の髄まで蕩けきってしまいそうな充足感。肉の悦びが背筋を甘くざわめかせながら、うなじのあたりまで這い上がってくる。視界がフワリと白くかすみ、強張っていた身体から力が抜けそうになった。

「あひぃ！　いっ、いい……んぐウッ！」

漏れそうになった歓喜の声を、ヴァンパイアハンターの少女は必死に押し殺す。ここで悦びの声を上げてしまったら、あとは際限なく堕ちてゆくだけだ。少女の忍耐を試すかのように、注挿が開始された。ズチュッ、ずぬっ、ズッ、パチュンッ……まろやかなヒップを打ち鳴らしつつ、緩急織り交ぜた巧みなストロークでヴァンパイアハンターのヴァギナを突き上げる藤堂。ワンストロークごとに膣壁が性感に目覚めさせられ、ペニスの感触がより鮮明に、甘美に迫ってくる。

（こんな奴に……こんな奴のペニスに……ッ！）

奈津姫の脳裏に、凶暴に反り返った赤黒い肉凶器の姿が浮かぶ。

（あんなのが、アタシの中に入ってるんだ……ンッ!!）

妖しい愉悦が背筋をゾクリとさせながら駆け抜け、巨根に蹂躙されているヴァギナがキュウンッ！　と収縮する。固く閉じたまぶたの奥で、鮮烈な快感の火花が散った。

（感じてる！　感じちゃってる。アタシ……挿れられて……ダメぇ！）

抗いようのない快感に煽られて、一層締めつけを強めた極上の濡れ孔を、男の肉棒はじっくりと責め立てて快感を掘り出しにかかった。

「ちっ、違うッ！　かっ、感じてなんて……いない……こんなので……んふぅっ！」
鼻にかかった呻き混じりに、拒絶の声を絞り出す奈津姫であったが、巨大な亀頭にグイグイとこじ開けられ、蹂躙されて擦り上げられる膣壁は、戦慄さえ感じてしまうほどの喜悦を湧き起こらせている。膣内の快感スポットをじっくりと探り抜くかのようなストロークのたびに、目の前に極彩色の火花が散り、密着コスチュームに包まれたスリムな腹部に、鍛え抜かれた腹筋の輪郭がキュッ、キュッと浮かび上がる。
「これは素晴らしい。柔らかな肉襞が、プルプルと震えながら締めつけてくるぞ。なんていやらしいオマ〇コなんだ！　君はオマ〇コまで天才なんだね」
言葉も駆使して羞恥を煽りつつ、藤堂は巧みなストロークでヴァンパイア少女のヴァギナを掻き回す。亀頭が抜け落ちる寸前まで腰を引き、そこから一気に突き上げて膣奥を抉り上げながら、鷲掴みにした指の間に乳首を挟み込んでギチギチと締めつける。
上半身と下半身の急所を同時に責められ、少女の喘ぎ声はどんどん甘く切ないものになってゆく。視界が揺らぎ、身体中が火照り疼いて意識が遠のいてくる。
真正面で見つめている耕太の目には、大量の蜜液を掻き出しながら陰唇の狭間をグチュグチュと淫音を立てて出入りするペニスの様子がはっきりと見えているはずだ。
「耕太に見られてる……犯されてるところ……耕太に……ッ!!」
心のつぶやきが声になってしまっていることも、淫熱にうかされた奈津姫にはすでに自覚できていない。ズンッ、ズンッ！　と力強い腰使いで子宮を突き上げられるたびに意識

が飛び、次の突き上げで覚醒させられる。
金髪を振り乱してのけ反ったハンター少女の顔に、あからさまな喜悦の表情が浮かんだ。半開きになって喘ぐ唇の端から、透明な涎がトロリと溢れ出て、汗ばみ紅潮した頬を伝う。
「奈津姫さん……凄く気持ちよさそうな顔してる。犯されて気持ちいいんだ……」
うっとりとした口調で、認めたくない事実を指摘してくる耕太。その声には、わずかに嫉妬の響きが混じっているように思われた。
「ちっ、ちが……うふぅぅ……違うのっ！　アッ、あんッ、はあぁぁんッ！」
必死に上げようとした否定の言葉も、小刻みな注挿で膣壁を擦り責められると切れ切れのよがり声に変換されてしまう。先ほど絶頂させられたときにも感じた、強い尿意にも似た切迫感が恥骨の裏側で狂おしいほどに強まってゆく。
「やぁぁ、漏れ……ちゃう……ッ！　出ちゃう……いやぁぁ、見ないでぇ。こんなとこ、見ないでぇぇ！」
先ほど潮吹きしたときは、股布の狭間から飛沫を噴き出すほどの勢いで絶頂水を射出してしまったのだ。性器を剥き出しにされた状態で、再び噴出してしまったら、目の前で見ている耕太を確実に汚してしまう。
「出るの？　奈津姫さんだけずるいよ。ボクも出したいのに……」
不満げな声で不平を漏らす耕太。少年のペニスは今にも暴発していまいそうにいきり勃ってはいるが、輪精管をせき止めたイバラ触手のせいで射精できないのである。

「そうですわね、水凪さんだけじゃあ不公平だから、あなたも気持ちよくしてあげるわ」
見物しているだけなのに飽きたのか、先汁を漏らしながらひくついていた耕太のペニスに陽子の指が再び絡みつき、サワサワと揺らめいて竿を扱き、亀頭をくすぐる。
「ひぃんッ！　ぼっ、ボクも犯されちゃうのぉ？　また……中で動いてえぇぇぇッ!!」
かすかに嬉しげな響きの混じった声を上げ、亀頭弄りの快感にのけ反る耕太。固く反り返ったペニスの胴にプックリと盛り上がった尿道の中で、何かが上下動しているのが奈津姫の目にも捉えられた。輸精管から尿道口に至る射精経路を、柔軟化したイバラ触手に犯されているのだ。
（こ、耕太も犯されてる……アタシと同じぐらい感じちゃってるの？）
小柄な少年と金髪のヴァンパイア少女は、向かい合わせの姿勢で最も敏感な器官を嬲られて絶頂へと追い込まれてゆく。少女のヴァギナで赤黒い巨根が激しく出し挿れされ、少年のペニスを白い妖指がスライドして、望まぬ愉悦で理性をドロドロに蕩けさせた。
グチュッ、グチュッ、ズチュッ、ズチュンッ！　濡れ蕩けたヴァギナを巨根が掻き回す粘着音に、金髪少女が上げる切れ切れのよがり泣きが混じる。
全ての感覚が、犯されている膣に集約されていた。自分の身体が巨大な女陰だけの存在になってしまったかのような錯覚さえ、奈津姫は抱いている。パワフルな注挿のたびに噴き出す愛液の飛沫が、真正面でペニスを嬲られる耕太にまで降りかかり、甘酸っぱくデコレーションした。

（やだ、……犯されて……漏らしちゃうっ、イッちゃうっ！）
少女の絶頂が近いのを悟ったペニスの動きが、一層激しくなる。緩急織り交ぜた抜き挿しに円運動を交えたテクニカルな腰使いで、巨大な亀頭が破瓜直後の膣壁を徹底的に責め立てた。女の急所を知り尽くしたピストンストロークを受けたヴァギナは、ビクッ、ビクビクッと、絶頂寸前の切羽詰まった収縮を開始してしまう。
（来ちゃうッ！　凄いのが……きちゃうよぉ！　こんな奴に犯されて、イっちゃう！）
胎内で始まった制御不能の収縮感が、絶頂の大波となって少女の肉体隅々まで痺れさせながら押し寄せてきた。
「いやぁぁ……漏れちゃう……アッ、あぁッ、ダメぇ！　ダメえエェェェ！」
恥ずかしい噴出を堪えようと、少女は必死に下腹を引き締める。結果的にそれは、膣とアヌスを繋ぐ八の字筋をきつく引き絞り、陵辱者のペニスを悦ばせる結果となった。
「くふぅ！　凄い締めつけだ。この淫乱オマ〇コに、そろそろ出しますよッ！」
「いやぁぁぁ！　出しちゃ……中に出さないでぇ！」
悲痛な叫びが聞き入れられるはずもなく、膣内奥深くまで突き込まれた牡槍が、ドクドクと力強い脈動を開始した。
ドプウッ！　ドクンッ！　ドビュッ、ドビュルッ、ドピュルルルルッ!!
膣内を灼熱させて、欲望の煮詰め汁がぶちまけられた。煮えたぎる精液の刺激を受け止めた子宮がポンプのように収縮して白濁液を吸い込んでゆく。胎内に広がるスペルマの熱

『第六章　屈辱の呪縛』より

イアハーフである彼女が安易な気持ちで吸血すると、血を吸われた者の肉体にどんな作用が起きるかわからない。それ故に、奈津姫には耕太という特異体質者が随伴しているのだ。

（人でいるために……アタシは……アタシは……）

目の前で揺れる三本のペニスに、チラリと視線を投げるハンター少女。凶悪なサイズで彼女を犯し抜いた藤堂のペニスと比べれば、可愛いとさえいえる牡槍であったが、ペニスには変わりがない。それを咥え、奉仕して、絶頂にまで導かねばならないのだ。トラウマを煽る牡器官を口にして、迸る絶頂汁を飲むことだけが、今の彼女にとって、人であり続ける唯一の道であった。

「ほら、早くフェラしてくれよ、チュパチュパって、さ」

「やっ、やだ、汚いのを近づけるな……！」

待ちきれなくなったツンツン頭が髪を掴み、すでに先汁をにじませている亀頭を口元に突きつけた。生臭いペニスの匂いが子宮を煮えたぎらせ、淫欲の炎が理性をジリジリと焼き焦がしてゆく。喉が火を噴きそうに渇き、呼吸さえままならなくなってくる。

（も……もう、耐えられないッ。精気を補給しないと……狂っちゃう！）

人の意識を保つために、ヴァンパイアハーフの少女は生まれて初めてのフェラチオ行為を開始する。震えながら開いた唇が、先汁をにじませたペニスの先端にプチュッと吸いついた。塩辛い味と、質の悪いなめし革のような牡臭さが口腔内に広がり、奈津姫の顔を嫌悪にしかめさせる。

「んっ……んふうぅぅ……ンッ。くちゅ……はむ……ん、あむ……ッ」
苦しげに眉をひそめたまま、舌の表裏を交互に使って張り詰めた亀頭を刺激し、左右に首を傾げながら、チュパッ、チュパッと音を立てて唇を吸いつかせる。
「んくふぅ……チャプ……チュッ、チュッ……はぷぅ……ピチュッ」
無心になろうと努力してはみても、どうしても嫌悪の感情が込み上げてくる。限界寸前にまで強まっている精気への飢えが、少女に屈辱のフェラチオ奉仕を続行させていた。
ツルリと滑らかな亀頭の感触は、思っていたほど固いものではなく、妙な弾力を感じさせた。鈴口を舌先がかすめると、ピクピクッ、と嬉しげに震えた亀頭の先から、塩辛く苦味の強い少年の欲情汁の味が舌の上に射出され、吐き気が込み上げてきてしまう。
「ん……ぐ……んっ！　チュ、チュッ、チュッ、ピチュルッ……チュブン……ッ」
えずいてしまいそうになるのを必死に堪え、亀頭全体をすっぽりと咥え込んで吸うと、ビクビクとしゃくり上げたペニスはひときわ濃い先汁を溢れ出させた。舌を火傷させそうな亀頭の熱が、忘れようとしていた吸血衝動を煽る。
「チュパ……ちゅぱ……チャプッ……ちゅぷっ、ちゅううっ……んんっ」
いきり勃った牡器官を舐め、吸いしゃぶる生々しい唾液音が、保健室の中に響く。
（このアタシが……こんな奴らのモノをしゃぶってる……）
亀頭を咥えた唇に少年たちの視線が集中し、蔑みの気配が伝わってくる。吸血衝動に屈することよりも、屈辱に耐えることを選択した少女は、命のエキスを求めて無心になって

舌を動かした。
「く……はぷぅ……んむ……ん……チュパ、クチュ、レロ、レロ、チュロンッ……」
目にしたときはそんなに大きいとは思えなかった亀頭だったが、口に含んでみると意外な圧力と存在感で口腔粘膜を圧迫してくる。自分がとんでもなくはしたないことをしているという認識が、今さらのように強まり、涙が出そうになった。
（早く……早く出してよ！　一体、どうやったら射精してくれるの？）
このままではペニスに歯を立てて吸血行為に及んでしまうのではないか……そんな危機感をおぼえた奈津姫は、ペニスを吸いしゃぶる動きを強める。昨夜、耕太の牡器官を愛撫していた陽子のテクニックを思い出し、急所と思われる先端のワレメを集中的に舐め、カリ首を唇で強く締めつけながら吸った。亀頭への奉仕を続けているうちに、頭の芯がジーンと痺れ、ペニスを射精に導くこと以外、何も考えられなくなってくる。
「チュパ、チュパ、チュパ、んむぅ……ズジュウゥッ……チュブウゥ……」
ペニスを咥え込んだ唇から恥ずかしい吸い音を上げ、奈津姫は無心になってフェラ奉仕を続ける。吸引を受けた少年は低い呻きを漏らして身体を強張らせる。口の中で、亀頭がひときわ膨らみ、ビクビクッ！　と切羽詰まった痙攣を起こした。
「ンッ……んむぅ……んんんん～ッ」
射精の脈動に恐怖をおぼえ、ペニスを吐き出しそうになった少女の黒髪をガッチリと掴んで頭部を固定し、ロッカー少年は射精の快感に身を委ねた。

ビクッ、ビクビクビクッ！　ドクンッ！　ドクッ！　ドプドプドプドピュルルルルルッ!!
ドプルルルンッ!!
激しく脈動したペニスの先端から灼熱のスペルマがどっぷりと射出され、口腔内に生臭い粘液が渦巻き溢れかえる。男の絶頂汁を口の中にぶちまけられているかと思うと吐き気が込み上げてくるが、飢えきった身体は、スペルマに含まれる精気に反応し、飲精の蠢きを開始してしまう。
「んむうぅぅぅーッ!!　んっ、んふっ……ン……ゴクッ、ゴクッ、ゴクンッ」
苦しげな呻きを漏らしつつ、喉にねっとりと絡みつく粘液を飲み込んでゆく奈津姫。暴れ回る亀頭を咥え込んだ朱唇がすぼめられ、白い喉が音を立てて動くと、少年の絶頂汁が食道を熱く焼きながら、ドロドロと下り落ちていった。
（うう……不味い……臭いッ。でも、確かに……精気が……）
顔をしかめながらも、吸血衝動がわずかに和らぐのを感じるヴァンパイア少女。ごくわずかな量ではあるが、まごうことのない生命エネルギーが、渇き切った身体に吸収されていく。しかしそれは、蜜のように甘く芳醇な耕太の血と比べると、あまりにも不純物が多く、酷い味だった。
『とうとう精液を飲んだわね。淫らで恥ずかしい娘だこと』
蔑みに満ちた陽子の声が脳内に響くが、奈津姫はそれを無視してスペルマを吸い続ける。力を取り戻し、逆襲するためにはどんな屈辱にも耐える。それだけを考えていた。しかし、

射精の脈動は数十秒で弱まり、白濁液の放出も止まってしまう。
（え？　もうおしまいなの？　こんなのじゃ、全然足りない！）
物足りなさをおぼえて未練げにペニスを吸い続ける少女の口から、射精を終えた牡器官がチュポッと音を立てて引き抜かれる。唇と亀頭の間にスペルマが白い糸を引いていた。
『おわかり？　血の渇きを癒やすには、十回や二十回の射精量では到底足りませんのよ』
脳内に響く陽子の声が、少女の徒労感を煽る。
「次はオレ！　パイズリフェラしてくれよっ！」
ニキビ面のデブ男が、奈津姫の上に馬乗りになってきた。過剰な体重を受け止めたベッドがギシッ！　と軋み、少女の顔にも苦痛の表情が浮かぶ。
「んっ！　重い……ッ！　やっ……何を？」
パイズリの意味もわからず狼狽する少女の美乳がムニュッと揉み寄せられ、密着度を増した乳房の谷間に、太短いペニスが挟み込まれた。しっとりと汗ばんだ乳肌がペニスの胴に吸いつき、圧迫して、陵辱者のニキビ面を恍惚と蕩けさせる。
でっぷりとした巨尻に胸を圧迫される息苦しさに呻く少女の上で、フゥフゥと荒い息をつきながら、デブ少年は腰を使い始めた。注挿のたびに、密着させられた乳球の狭間から、赤く充血した亀頭がヌムッ、ヌチュッ、と突き出してくる。太い身体を揺すって腰を使いながら、オッパイフェチのニキビ少年は乳房をグニュグニュと揉みまくり、勃起した乳首を親指の腹でグリグリと転がしてくる。

「あふっ、くっ……つぁ……ぁ。こんなの……無理……くはぅ……ンッ」
乳辱の快感に震えながら、必死に頭を起こし、ペニスの先を咥えようとする奈津姫。しかしペニスが短いせいで、舌をいっぱいに伸ばさないと先端に届かない。デブ少年のフウフウという荒い鼻息に、突き出された舌先と亀頭が触れ合うピチュ、チュピ。チュクッという小さな淫音が混じる。
「ほら、こっちも咥えるんだよ！」
順番を待ちきれなくなった背の高い少年が、横からペニスを突きつけてきた。細長い牡器官が、突き出された舌を擦って斜めに潜り込む。せわしない腰使いで犯されるたび、紅潮した少女の頬が内側から突き上げられ、ポコッ、ポコッと出っ張りを浮き出させた。
注挿を開始して一分と持たず、背の高い少年のペニスがビクビクと痙攣し始める。
「ン⁉　んむふうぅぅッ！」
ビュクッ！　ビュククッ！　と牡槍がしゃくり上げ、歯茎と頬の内側にドロドロのスペルマがぶちまけられこびりついた。ビュルビュルと噴き出す粘液が歯茎をくすぐり、嫌悪と窒息感に震える舌に不快な苦味を染み込ませて口腔内を汚し抜く。
早漏気味に射精してしまった恥ずかしさを取りつくろうつもりなのか、ペニスを荒っぽく引き抜いた背の高い少年は、パイズリ責めを受けている少女の股間に顔を埋め、荒っぽくむしゃぶりついた。
「きゃふうぅ！　きゅうぅぅんっっっ！　……んふぅぅ……はぁぁぁアァァン」

乳房の快感にクンニの魔悦を上乗せされて、奈津姫はひとたまりもなく果ててしまう。ちょっと責められただけでイってしまう自分の身体が疎ましく、性感を開発した藤堂に対する憎しみがさらにつのった。

「自分だけイってないでしゃぶってくれよ！　でないとオッパイに出しちゃうぞ！」

汗みずくになって腰を振りながら、デブ男が命じてきた。

「チンポに顔が届かないんなら、手伝ってやるよ」

ロッカー少年が奈津姫の髪を鷲掴みにして頭部を引き起こした。

「くぁ……んっ、んむふぅ……」

先汁まみれになった乳房の谷間から顔を覗かせる亀頭の先端が、苦しげに呻く少女の口に潜り込む。鈴口を割って入り込んだ舌先が尿道口を柔らかく犯す快感が、ニキビ少年の射精中枢を直撃した。乳房の谷間でビクビクビクッ！　とペニスが脈動を開始し、粘り気の強い体液を噴出させた。胸元を飾っていたコウモリ型のチョーカーヘッドを、青臭いスペルマが容赦なく汚してゆく。

「だっ、ダメぇ！　ちゃんと……くっ、口にッ！　あぁぁぁんッ！」

大切なアイテムを汚され、悲痛な声を上げる奈津姫の顔面にも、ピチャッ、ピチュッ！と音を立ててうっすらと黄ばんだ白濁液が粘りついた。口の中に飛び込んだ精液の塊が、物足りない精気を放ちながら喉を下り落ちてゆく。

口内射精に失敗したニキビ面は、身体をズリ上げてペニスを咥えさせてきた。

『第七章　血の狂想曲』より

「あひいいいいいっ！　いっ、ひっ、やはあぁぁぁ〜ンッ!!」
憎むべき敵のペニスを深々と突き挿れられ、早くも絶頂寸前まで極めさせられてしまうハンター少女。ヴァギナとアヌスの収縮は、恐ろしいほどの快感を生じさせていた。キュウキュウと引き絞られた膣壁が、突き挿れられた器官にピッチリと密着し、その形状を余すところなく伝えてくる。
「こ、これが……耕太の……ちっ、ちがう……違うぅぅ〜」
これは断じて耕太の勃起ではない……自分に言い聞かせようとする奈津姫であったが、飢えきったヴァギナはコピーペニスに絡みつき、快感を貪ってしまう。
「いい締めつけですわ。この締めつけ、そのまま耕太君に返して差し上げましょう」
色っぽい表情で言った陽子のヴァギナが、奈津姫のものと寸分違わぬ収縮と痙攣を起こして少年のペニスを嬲り回した。
「ふわぁぁぁんッ！　そっ、そんなに締めたら、イっちゃうっ、ダメぇぇえ、出せないのに、イ……クウゥゥゥゥッ!!」
ビクンッ！　ビクビクビクビクビクッ、ビクンッ！　ドクンッ！　ドクウウンッ！
奈津姫の膣内で、陽子の疑似ペニスが激しく脈動する。それは紛れもない耕太の絶頂であった。グンッ、グンッと射精無き脈動を起こしてしゃくり上げる牡器官が、ハンター少女のGスポットを強烈に圧迫し、狂おしいほどの尿意を弾けさせる。
「きひぃあぁぁぁぁぁ〜ッ！　らめぇ、出ちゃウッ、うあぁぁぁぁ〜ッ!!」

プシイイッ！　ぷしゃぁぁぁ～ッ！　射精できぬペニスのかわりに、少女の秘裂が派手な潮吹きを起こし、陽子の下腹をビショビショに濡らす。

「あらあら、はしたないお漏らしですこと。お互いの快感を疑似体験する気分はいかがかしら？　もっともっと体験させて差し上げますわ」

奈津姫のものをコピーしたヴァギナがペニスを締めつけ、耕太のものをコピーしたペニスが脈動しつつ注挿される。ハンター少女と相棒の少年は、陽子を媒介としての交わりを強要されて乱れ狂わされた。

「ふわあぁぁっ！　アッ、アッ、あぁぁんッ！　らめぇぇ、また、またイっちゃうふうぅぅう～ンッ!!」

甘く透き通った声を上げ、奈津姫はもう何度目ともわからぬ絶頂へと舞い上がった。半ば意識を飛ばされているうちに、体位が変えられている。制服の残骸を全て引き毟られ、黒革の戦闘コスチューム姿となったヴァンパイアハンターは、床の上で仰向けになった陽子の上で、まろやかなヒップをバウンドさせていた。

騎乗位で結合した奈津姫のヴァギナを、生徒会長の疑似ペニスが真下から貫き、子宮をしたたかに突き上げている。黒髪を振り乱した少女は、みずから動いて快楽を貪りながら、周囲を取り囲んだ少年たちのペニスにも奉仕する。

「はむ……ンッ……チュッ、チュパ……れるっ、レロレロレロッ……んちゅうぅぅッ」

精液に白くぬめった黒革グローブで、固い牡槍をヌチュヌチュと扱き上げ、濡れた朱唇で亀頭にキスし、舌を差し伸べて舐め回し、口に含んでは頬をすぼめて吸いしゃぶる。すっかり慣れきった指使いと舌のくねり、熱く蕩けた口腔の吸引は、若いペニスを次々に弾けさせ、新たな白濁で少女の身体を彩った。

「あっ！　あぁぁ、お願いです。もう、出させてぇ！　射精ッ！　シャセイさせてぇ！」

目の前で次々に射精する男子たちのペニスを、羨ましげに見つめながら、耕太は必死になって腰を使っている。少年のペニスは、今もなお陽子のヴァギナに咥え込まれたままであった。猛った肉柱を深々と突き挿れるたびに、生徒会長の疑似ペニスを貪る奈津姫のヒップに、パチュンパチュンと音を立てて下腹がぶつかるのが心地良く、そしてもどかしい。

「ふみゃあぁぁ！　らめぇぇ！　また、またイっちゃう、イっちゃうよぉ！」

甘い声を上げて乱れ狂う少女の動きが、陽子と繋がったままの耕太も刺激し、すぐ目の前でしなやかにくねる肢体が欲情を煽り立てる。しかし、ハンター少女は一度も耕太の方を振り向かず、ヒップの上下動と、男子生徒たちのペニスへの奉仕に没頭している。快楽の輪の中で、自分だけが射精もできず、奈津姫の愛撫も受けていない。

「奈津姫さん……奈津姫さぁぁぁーんっ!!　ボクも、ボクもぉぉぉぉーっ!!」

孤独感と疎外感に苛まれながら、少年はひたすら生徒会長のヴァギナでピストン運動を続けていた。

「アタシ……アタシ、もぉ、イっちゃうっ、あぁぁんっ！　漏れちゃウウゥゥッ!!」

騎乗位でペニスを貪っていた奈津姫の身体が、切羽詰まった痙攣を起こす。恍惚と見開かれた目は焦点を失い、スペルマにまみれた顔に蕩けた悦楽の表情が浮かぶ。
「完全に堕ちましたわね。私も果てますわっ！　あなたもお果てなさい！　魂さえも吹き飛ばして悦楽の彼方へ!!」
狂喜の笑みを浮かべた陽子は、喜悦の震えを交えた声で叫び、下からの深い突き上げでとどめの一撃を送り込むと同時に射精を開始する。
ドクンッ、ドクドクドクドクドクンッ！　ビュルッ、ビュルッ、ブシャァッ！　ドプウウッ！　ズビュルルルル～ッ！
灼熱の絶頂ジェルが、凄まじい勢いで奈津姫のヴァギナにぶちまけられる。ほぼ同時に、奉仕を受けていた少年たちも、とどめとばかりに白濁液を撃ち放った。
「ひゃはぁぁぁぁ～ンッ！　イクッ、イクイクイクイクッ！　ふあぁぁぁ！　やはぁぁぁんっ！　中に出されてっ！　オマ〇コが灼けちゃウウッ!!　イッ……ヒイィィィィィィィィィ～ンッ!!」
プシィッ！　プシャアッ！　ブシャァァァァ～ッ！　ジョバァァァァ～ッ！
派手な潮吹きを起こしながら、精液まみれの黒レオタードが壮絶な絶頂へと舞い上がる。
「なつきさぁぁぁぁーんッ！　ボクも、ボクも出したいよぉ、出させてぇぇぇ～ッ!!」
スペルマまみれのヒップや、ヒュクヒュクと痙攣するアヌスを、背後から伸びた耕太の手が荒っぽく弄り回し、絶頂感中の奈津姫をさらなる高みへと舞い上がらせてゆく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!